

琵琶湖を守るための活用のあり方について  
～第 2 回 琵琶湖活用推進検討会議の概要～

1. 会議の概要

- ◇日 時 平成 29 年 10 月 2 日 (月) 14:00～16:00
- ◇場 所 県庁本館 4-A 会議室
- ◇出席委員 10 名 (欠席 3 名 井手委員、大橋委員、中村委員)
- ◇議 題 琵琶湖活用の現状や課題について 他

2. 委員からの主な意見

1. 検討の趣旨について

- ① 「活かす人」と「守る人」がイコールになるのが理想だが、最初は別々である両者の間を「結ぶ人」「つなぐ人」を想定すると循環が生まれる。
- ② 誰に向けた「あり方」なのかを明らかにする必要がある。県民や県内企業はもちろん、下流域や全国に対しても琵琶湖の価値の訴求が必要
- ③ 発信の手法は大切で、いかにも行政的な標題の報告書があっても誰も読まない。「ナントカ作戦」といったソフトな表現や、カタカナ・郷土ことばの使用など、目を引くキャッチーなニックネームの工夫を。
- ④ 琵琶湖の恵みを単に利水治水ではなく「生態系サービス」と広く捉えることは重要で、これまでの琵琶湖の見方を変える視点。国交省だけによる管理ではなく、農林水産や文化などに広く関わるものであることの再認識につながる。

2. 琵琶湖活用の現状と課題について

- ① 琵琶湖活用の現状については、湖沼会議や国際貢献など「国際交流」の視点を。
- ② 周囲の森林で働く人たち自身に、琵琶湖の保全に貢献しているという森林の価値を伝える工夫が必要。その価値が当事者にもさほど認識されていないと感じる。
- ③ 水草やオオバナミズキンバイ等、琵琶湖には未解決の課題が山積している。活用と保全が別に動くのではなく、県庁内での協働をしっかりと欲したい。

3・4. (1) 価値を「知るしくみ」関係

- ① 「滋賀には何もない」という県民が多いが、活用の基礎として、まずは「琵琶湖こそ宝である」ことを広く認識いただくことが必須
- ② 「森川里湖をつなぐ」は重要なキーワード。この普及にどう貢献できるか。
- ③ 都市部の若者は正直、滋賀や琵琶湖にほとんど関心がないのが現実。他府県市でおもしろい動画を配信し、SNS で何万回も拡散されているような事例があるが、多少ふざけた発信でも、まずは若者に興味を持ってもらうことが必要

3・4. (2) 魅力に「関わるしくみ」関係

- ① 湖上スポーツの体験イベントを開催したが、参加者には湖上スポーツが初体験だという人が多かった。琵琶湖はポテンシャルこそあるが、実際に体験ができる機会が少ない。
- ② 湖岸のカフェなどのロケーションの良さが、あまり知られていない。
- ③ 「食べれば食べるほど、琵琶湖がきれいになる」として、湖魚を食べるツアーを企画しており大変人気。山と里を見て湖をかんがえるツアーや、水源のトレイルの山歩きなども実施している。

- ④ 東京でのインバウンドにかかる商談会で、「和菓子づくり体験」は人気なのに、「湖上レジャー」は今ひとつだった。どこの地域も同じようなメニューを提供しているので、「琵琶湖ならでは」の体験を再度考える必要がある。
- ⑤ 「学ぶ」上では、琵琶湖総合開発やせっけん運動など琵琶湖の「歴史」も重要
- ⑥ 県内各所での学習機会や体験メニューなどを、総合的に発信するツールがあればよい。

### 3・4. (3)活用を「続けるしくみ」関係

- ① マンパワーとして、「よそ者の力」を借りることが必要だとのメッセージを。
- ② 「活かす人」は地域でお金を消費し、「守る人」はお金を使って保全をしている。今はこのお金が違う色なので、この双方のお金を同じ色にするような経済的合理性を作っていくことが、好循環を生むように感じる。

### 「琵琶湖活用推進検討会議」委員

(50音順・敬称略)

	所属名	役職名	氏名	(備考)
1	滋賀県立大学 環境科学部	教授	井手 慎司	マザーレイク フォーラム
2	株式会社 エフウォーターマネジメント	国際部 係長	大橋 希	水環境 ビジネス
3	NPO 法人 琵琶湖ローイング CLUB	代表理事	小原 隆史	スポーツ・ 福祉
4	琵琶湖汽船株式会社	代表取締役社長	川戸 良幸	観光・ 湖上交通
5	滋賀大学 環境総合研究センター	センター長	北村 裕明	学識経験者 【座長】
6	滋賀県立大学 人間文化学部	学生	久保 瑞季	※大阪より沖 島に移住
7	滋賀県教育委員会 幼小中教育課	主査	栗田 一路	教育
8	滋賀県漁業協同組合連合 青年会	会長理事	中村 清作	農林水産業 (漁業)
9	関西アーバン銀行	CSR・環境事業室 審議役	原田 久明	金融
10	東近江市永源寺森林組合	技術職員	松尾 扶美	農林水産業 (林業)
11	株式会社エフエム滋賀	アナウンサー	森田 純史	メディア
12	守山市 環境政策課	課長	山本 祐美子	行政
13	オーパルオペテックス 株式会社	代表取締役	山脇 秀錬	スポーツ

平成 29 年 10 月 2 日(月)  
琵琶湖活用推進検討会議 資料

(仮称)「保全再生に向けた琵琶湖の活用のあり方」

～琵琶湖を守るために、琵琶湖を活かす～ 骨子 (案)

## 全体の構成

### 1. 検討の趣旨

- (1) 「守る」と「活かす」の好循環
- (2) この検討がめざすもの
- (3) 活用にあたっての視点

### 2. 琵琶湖活用の現状と課題

- (1) 琵琶湖活用の現状
- (2) 活用への課題

### 3. 活用に当たって求められるもの

- (1) 琵琶湖の価値を「知るしくみ」(正しく知る)
- (2) 琵琶湖の魅力に「関わるしくみ」(触れる・広める・交わる)
- (3) 琵琶湖の活用を「続けるしくみ」(支える・抑制する)

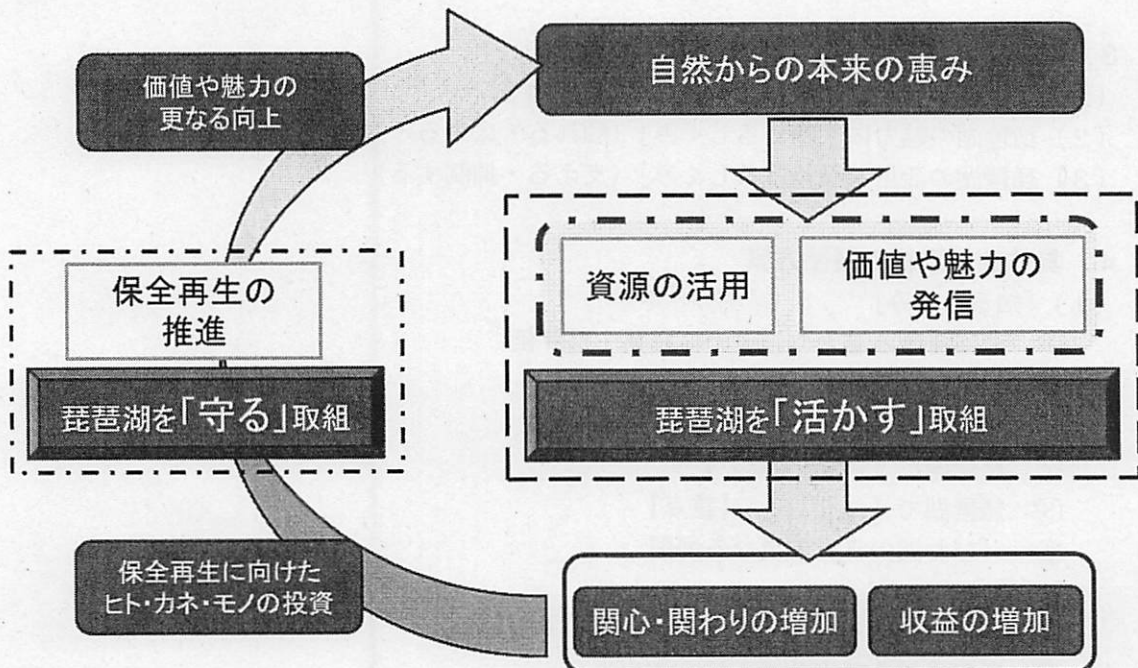
### 4. 具体的な取組の展開方策

- (1) 「知るしくみ」
  - ① 地域資源の魅力や価値の再発見・再評価
- (2) 「関わるしくみ」
  - ① 琵琶湖を「楽しむ」【重点】
  - ② 琵琶湖に「学ぶ」【重点】
  - ③ 琵琶湖で「つながる」【重点】
  - ④ 「びわ湖の日」の更なる展開
- (3) 「続けるしくみ」
  - ① 活用を支える制度・支援のしくみの充実
  - ② 活用に伴う環境負荷を抑える工夫

## 1. 検討の趣旨

### (1) 「守る」と「活かす」の好循環

- 琵琶湖保全再生計画においては、「琵琶湖を守ることと活かすことの好循環を更に推進」するための方策を検討する(計画7(1))としており、これを計画の重点取組と位置付け。
- 活かすとは、「琵琶湖を守り育て、次の世代により良い琵琶湖を引き継ぐために、琵琶湖とその恵みを活用する取組」のこと。
- ライフスタイルが変化し、暮らしと琵琶湖との関わりが希薄となる中、琵琶湖の保全再生を進めるには、琵琶湖やそれを囲む自然の恵みを活用し、またその価値や魅力をしっかりと発信することで、人々と自然との関わりを取り戻すことが必要
- また、産業構造が変化する中で、保全との活用との循環を持続させるには、自然の恵みを活かし、確実に収益へとつなげることが不可欠
- これらによって人々の関心が琵琶湖やその周囲の自然へと向かうとともに、活用の産んだ収益が保全再生へと投資されることで、社会的・経済的な循環が生まれる。
- ここでは「琵琶湖を守るための活かし方」として、「琵琶湖を中心とする滋賀の自然から享受する恵みの活用や価値・魅力の発信により、人々の関心・関わりの向上や収益の確保につなげ、もって琵琶湖保全に向け主体的な行動を起こすことができる人材の育成や、環境への投資を推進する」ことで、琵琶湖の保全再生に資する方策について検討を行う。



## (2) この検討がめざすもの

- 琵琶湖を守り育て、次の世代により良い琵琶湖を引き継ぐために、琵琶湖とその恵みの活用や価値・魅力の発信を進めるための現状・課題について整理し、求められる方策を検討し、指針として提示する。
- 同時に、守ることと活かすことの好循環を更に推進する具体的な取組方策について検討を行う。
- これにより、多様な主体がそれぞれの立場から琵琶湖との関わりを深め、保全再生の推進に向け「琵琶湖新時代」と呼ぶに相応しい循環の創出の実現を目指します。

**琵琶湖を「活かす」人が、琵琶湖を「守る人」になる  
好循環の創出**

## (3) 活用にあたっての視点

### 【自然の恵みの再評価】

- 琵琶湖や自然のもたらす恵み（生態系サービス）について、これまでは主に水や食料を供給するといった「供給サービス」に着目されてきたが、それ以外にも
  - 調整サービス：森林による土壌の流出防止、気候調整、水浄化など
  - 文化サービス：文化や芸術、景観やレクリエーションの場の提供など
  - 基盤サービス：物質循環や大気の維持など、他のサービスの基礎となるものといった恵みがあり、これらの恵み、特に調整サービスと文化サービスの側面についても目を向ける（＝活用すると同時に、持続可能性を意識する）ことが必要

### 【多様な循環とその持続可能性】

- 持続可能な循環の形成にあたっては、物質や生態系の循環のみならず、社会的・経済的な面での循環が健全かつ一体的に行われ、かつ持続可能であることが必要
- 琵琶湖や自然の有する多義的・多面的な価値に鑑み、多様なつながりを意識した活用が不可欠
  - ・「その先のつながり」を考える。（因果や多方面への影響に配慮）
  - ・時間軸を越えて考える。（歴史的経緯や将来世代への配慮）
  - ・他の生き物のことを考える。（生物多様性への配慮）

## 2. 琵琶湖活用の現状と課題

### (1) 琵琶湖活用の現状

- 現在の活用状況について、分野別に整理  
(別紙「琵琶湖活用の現状について」参照)

### (2) 活用への課題

- 併せて、ヒアリング等から把握した課題について整理

#### 【課題】

- 琵琶湖や地域資源の魅力・価値の再発見・再評価
- 体験の場・機会の確保
- 情報の掘り起こし・集約・発信力強化
- 琵琶湖に関わる主体の協働・交流の促進
- 活用を支える制度・支援のしくみ
- 環境負荷を抑える工夫

## 3. 活用に当たって求められるもの

- 上記の課題から、活用推進にあたり必要と思われる取組について、大きく3つの「しくみ」として類型化します。

### (1) 琵琶湖の価値を「知るしくみ」(正しく知る)

- 琵琶湖自身の魅力や価値について、正しく認識・評価を行うことは、活用にあたっての前提として不可欠
- 県民自身の再認識を進めるとともに、大学生には県外出身者も多く、京阪神を中心に滋賀へと移住してきた層などに向け、琵琶湖の基礎的な価値を認識いただくことも必要

#### ■地域資源の魅力や価値の再発見・再評価…①

- ・琵琶湖の役割や地域資源に対する地域住民の理解促進
- ・琵琶湖の価値の下流域への普及啓発
- ・外部評価等による魅力・価値の客観化
- ・農林水産業や生活文化の持つ魅力・価値の再認識
- ・研究成果等の分かりやすい発信

### (2) 琵琶湖に「関わるしくみ」(触れる・広める・交わる)

- 生活様式の変化で自然と触れる機会が減る中、かつては普通に存在した「体験をするための場所や機会」を、積極的に提供することが必要
- また、そのための情報の収集や提供を行うことや、主体間のネットワークを広げていくことが必要

#### ■体験の場・機会の確保…②

- ・水辺や自然に親しめる場の確保
- ・琵琶湖の魅力を体験する機会の確保
- ・体験メニューやプログラムの作成、普及啓発

■情報の掘り起こし・集約・発信力強化・・・③

- ・県内各地の情報収集機能の充実
- ・SNS等を利用した情報の受発信
- ・一元的な情報発信のしくみづくり

■多様な主体の協働・交流の促進・・・④

- ・琵琶湖に関わる主体が協働できるしくみづくり
- ・企業や大学等の主体との連携促進
- ・都市部と農村部や世代間などのつながり創出
- ・出会いの場や、マッチングの機会創出

(3) 生まれた循環を「続けるしくみ」(支える・抑制する)

- 保全再生と活用との循環を持続可能なものとするためには、現場へのアクセスや人材、機材、技術や資金の面なども含め、活用をサポートする仕組みが必要
- また、同様に持続可能性の観点から、資源に過剰な負荷を与える活用手法に対しては適切なルールや規制も必要

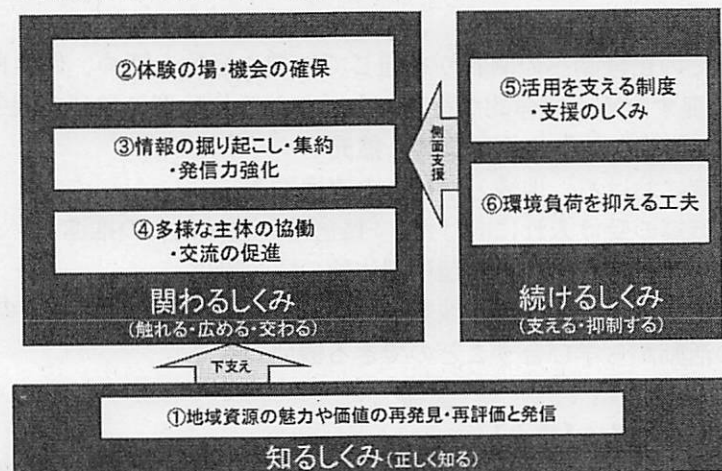
■活用を支える制度・支援のしくみ・・・⑤

- ・自然や湖岸に対するアクセス手段の確保
- ・技術開発の推進・支援や先進技術の移転・普及
- ・助成制度や機材貸出し、講師派遣等の情報提供
- ・関係官庁の情報共有の制度づくり

■環境負荷を抑える工夫・・・⑥

- ・法令やルールの確実な普及啓発
- ・各種の利用規制や経費負担
- ・調査研究や技術開発の推進

- 「知るしくみ」を基礎に、琵琶湖と「関わるしくみ」の拡充に努めます。
- また、持続可能な循環のために、活用の支援や活用にもなる環境負荷の低減など、「続けるしくみ」の充実により関わり創出を側面支援します。



しくみの類型化 (3つの柱) のイメージ

## 4. 具体的な取組の展開方策

- 前章で類型化した3つの柱別に、具体的な取組の展開方策を検討します。

### (1) 「知るしくみ」

- 活用推進の前提となる、琵琶湖の魅力や価値についての基礎的な認識の普及に努めます。琵琶湖の世界的に見ても希少な古代湖である価値を伝えるとともに、琵琶湖を囲む森川里海が一連のつながりを持ち、また暮らしと湖の間にも、相互に関わりがあることを分かりやすく伝えることに配慮します。

#### 【具体的な取組方策の例】※今後調整、拡充

- ・ 新たな「琵琶湖ハンドブック」など、琵琶湖を学ぶ基礎資料の充実
- ・ 琵琶湖博物館や琵琶湖環境科学研究センターの研究成果の活用・発信
- ・ 森川里海のつながりや、なりわい相互の関係性の「見える化」推進
- ・ 認証取得などによる、琵琶湖の価値の客観化の推進

### (2) 「関わるしくみ」

- 琵琶湖への関わりを創出するため、「琵琶湖を楽しむ」「琵琶湖に学ぶ」「琵琶湖でつながる」の3つの切り口から重点的に取り組み、具体的な取組方策を推進します。

#### ① 琵琶湖を「楽しむ」【重点】

- 琵琶湖へと関わるハードルを下げ、より多くの方に琵琶湖との関係を作っていただけるよう、琵琶湖を舞台とした様々な楽しみの機会を拡充します。

#### 【具体的な取組方策の例】※今後調整、拡充

- ・ 森川里湖を舞台としたエコツーリズムの推進
- ・ ビワイチの普及・発信
- ・ 誰もが楽しめる湖上スポーツの普及、推進
- ・ 適正なレジャー活動の推進と啓発
- ・ 「湖魚を食べる」習慣や美味しさについての普及・発信・機会創出
- ・ 湖岸での健康づくりの推進や、癒しの場の普及
- ・ 琵琶湖を楽しむことができる機会やスポット等の情報集約・発信
- ・ 楽しみながら情報交換や交流を進めることのできる機会づくり

#### ② 琵琶湖に「学ぶ」【重点】

- 様々な活用での琵琶湖への関わりを通じて知識や経験を深め、保全再生に向け行動できる人育てを促すため、主体的な行動へとつながる体験型の学びの機会を提供します。

#### 【具体的な取組方策の例】※今後調整、拡充

- ・ 環境教育における、地域と学校との連携推進
- ・ 教育旅行等の受け入れに向けた、「琵琶湖の教材化」の推進
- ・ 大学等と連携した学生への琵琶湖体験の機会提供
- ・ 県内学校や自治会等、下流域等への出前講座の推進、メニューの整理・発信
- ・ 相互の活動から学び合うことのできる機会づくり

#### ③ 琵琶湖で「つながる」【重点】

- 琵琶湖に関わる多様な主体のネットワークづくりを進め、協働を促進します。



【具体的な取組方策の例】※今後調整、拡充

- ・ 多様な主体による推進組織の立ち上げ
- ・ マザーレイクフォーラム等における、関係者のつながりづくり
- ・ 企業や大学等との連携の推進
- ・ 企業間の連携や、先進事例等の情報共有の推進

④ 「びわ湖の日」の更なる展開

- 「楽しむ」「学ぶ」「つながる」を始めとする多様なアプローチにより、琵琶湖との関わりをつくるきっかけとなる取組を、7月1日「びわ湖の日」を中心に重点的に展開します。

(3)「続けるしくみ」

- 活用推進を持続可能なものとするための環境整備や支援、活用に伴う環境負荷への対策を着実に推進します。

① 活用を支える制度・支援のしくみの充実

- 持続可能な活用の推進に向け、周辺環境の整備や技術、資金面での支援等を進めます。

【具体的な取組方策の例】※今後調整、拡充

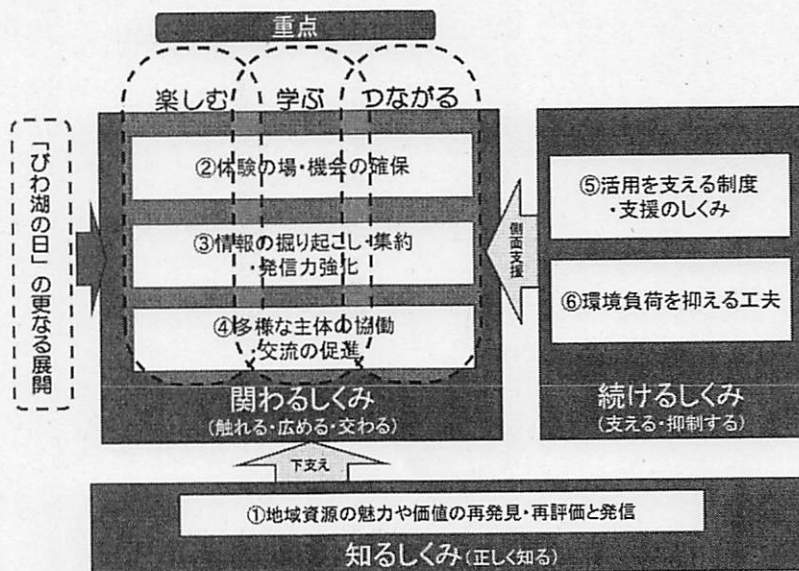
- ・ 自然体験や学びの場に対するアクセス手段の確保についての検討
- ・ 多様な知見を活かした技術開発の推進や支援
- ・ 基金など活用に寄与する助成制度の情報収集、発信

② 活用に伴う環境負荷を抑える工夫

- 活用に伴い発生する環境への負荷を抑えるための取組により、持続可能な琵琶湖活用を実現します。

【具体的な取組方策の例】※今後調整、拡充

- ・ レジャー活動に伴う規制や監視、制度の啓発の実施
- ・ 保全地域等の設定による適切な規制の実施
- ・ 環境負荷に伴っての経費負担のしくみづくり
- ・ 環境課題に係る調査研究や技術開発の推進



しくみの3つの柱と取組の展開方策

## 資料：琵琶湖活用の現状について

琵琶湖は我が国最大の湖として 275 億 $\text{m}^3$ の水を貯え、京阪神 1,450 万人の暮らしを支える水源であるとともに、近畿圏の治水面でも重要な役割を担っています。また、400 万年の歴史を持ち、60 種もの固有種が生息するなど貴重な生態系を有し、貴重な自然環境及び水産資源の宝庫となっています。(「琵琶湖の保全及び再生に関する法律」第 1 条)

利水治水以外にも、琵琶湖は多様な活用をされており、ここでは琵琶湖活用の現状について項目別に概観します。なお各項目は必ずしも独立するものではなく、相互に関連を有する項目や、複数の項目に関わる活用事例も多数存在します。

### 1. 学術研究 (関係条文：法律第 9 条)

本県には京都大学の生態学研究センターや流域圏総合環境質研究センターが立地し、平成 29 年度からは県立の琵琶湖環境科学研究センターに国立環境研究所琵琶湖分室が設置されるなど、その貴重な生態系などから琵琶湖は学術研究の場としても重要な価値を有しています。

また、県内に集積が進む大学において、大津市の龍谷大学農学部(平成 27 年度設置)や草津市の立命館大学食マネジメント学部(平成 30 年度設置予定)など、自然の恵みと密接な関連を持つ学部の新設も進んでいます。

### 2. 琵琶湖にまつわる産業 (関係条文：法第 10 条、11 条、16 条、17 条)

琵琶湖の水産資源を活用した水産業では、「えり」など独自の漁法や、湖魚食の文化が特有のものとなっています。内湖やヨシ帯の減少、外来魚の影響、漁師の高齢化や後継者不足、また食生活の変化による湖魚食の低迷などの要因により、琵琶湖の漁業は大変厳しい状況にあります。湖魚食の普及に向けて、県では「琵琶湖八珍」の選定・普及活動や、学校給食での提供などの施策を展開しています。

自然の恵みを活用した農業や林業も、琵琶湖と密接な関わりを有しています。ニゴロブナなどの湖魚が、排水路に設置された魚道を通して田んぼに遡上する「魚のゆりかご水田」において、湖魚の産卵・繁殖など、いくつかの条件を満たした田んぼで生産されたお米を認証ブランド化する取組を進めており、平成 28 年度には 6 地域・約 74ha でこの「魚のゆりかご水田米」が栽培されました。また、県内の森林から適切に伐採された原木と、その原木を滋賀県内で加工した製材品等の木材を「びわ湖材」として産地証明し、その利用を推進しています。いずれも、琵琶湖の生態系や水源となる森林を守る取組が、農業や林業に付加価値を高めるものです。琵琶湖と共生してきた滋賀の農林水産業については、「世界農業遺産」への認定を目指す取組が進んでいます。

ビジネス面においても、琵琶湖の周囲に集積する水環境関連産業や研究機関が連携し「しずか水環境ビジネス推進フォーラム」を組織しており、琵琶湖の保全再生で得た成果を途上国の環境改善等に活かす取組などが進んでいます。

### 3. 観光・レジャー（関係条文：法第18条、19条、20条）

琵琶湖に代表される豊かな自然は、本県の大きな観光資源のひとつでもあり、観光入込客統計調査では、「自然」を目的とした来訪者は100万人を越えています（平成27年）。

「滋賀の旅に便利なDATA集」（発行：びわこビジターズビューロー）には21か所の水泳場が紹介されており、そのうち8か所で県が毎年実施している「水浴場水質調査」では、3つの水泳場が「水質AA」評価となっています（平成29年度）。

また、毎年8月に実施される「びわ湖大花火大会」は、湖面に映る壮大な花火が魅力であり、県内外から約35万人が集まる一大イベントとなっています。

他にも、びわ湖クルーズや竹生島めぐり・多景島めぐりといった湖上観光や、ヨットやカヌーなどの水上スポーツ、湖岸緑地等でバーベキュー等も人気です。バスフィッシングやプレジャーボートについては、「滋賀県琵琶湖のレジャー利用の適正化に関する条例」（通称「琵琶湖ルール」）に基づき、自然環境や生活環境に影響の少ないレジャーの推進に向けた規制や啓発を展開しています。

約200kmのびわ湖一周サイクリング「ピワイチ」は、輪の国びわ湖推進協議会による認定証の発行が1,450件（平成28年度）と、前年度より200件以上増加するなど、順調に広まりつつあります。また、近年では湖との暮らしが育んだ独自の生活文化に着目し、「かばた」のある暮らしや沖島での生活などを訪ねる人の増加や、琵琶湖疏水への観光船の運航に向けた取組が進むなどの動きがあります。

### 4. 湖上交通（関係条文：法第19条）

鉄道やトラック等による輸送が普及する以前は、中山道や北陸経由で運ばれてきた物資を大量に、かつ迅速に京都へと運ぶことのできるのは琵琶湖の水運でした。1960年代半ばまでは、琵琶湖は水資源や漁場であると同時に、暮らしに密接に関連した道であり、また各種の生業の場として、多くの船が行き来していました。

湖上での物資の運搬が一般的ではなくなった現在でも、観光を目的とする湖上クルーズや沖島、竹生島等へのアクセス手段として、また災害時等の避難や物資の輸送手段としても湖上交通が活躍をしています。琵琶湖の大型船の上では、シンポジウムの開催や結婚披露宴なども行われています。

### 5. 景観・文化（関係条文：法第20条）

琵琶湖八景に代表される近江の風景は、古来より多くの文学作品の舞台となってきた他、

文化財にも恵まれた滋賀には、街道や寺社仏閣などの歴史的な遺産が多く残っており、芭蕉など多くの文化人が行き交いました。現在でも、歌枕や絵画・写真等の素材として琵琶湖は人気のあるスポットです。その他、近年では映画やテレビドラマのロケ地としても登場することが増えています。また、例年 9 月に烏丸半島で開催されている野外音楽イベント「イナズマロックフェス」など、湖岸のロケーションを活かした音楽イベントも開催されています。

湖岸のヨシ原の風景は「日本の原風景」として評価されており、「近江八幡の水郷」は重要文化的景観の第一号に認定されています。また、高島市針江地区の「かばた」など、湖が育んだ生活文化にも注目が集まっており、琵琶湖周辺の寺社や水と共生する暮らし、独自の食文化等が、「琵琶湖とその水辺景観一祈りと暮らしの水遺産」として、平成 27 年に文化庁より「日本遺産」の認定を受けています。

## 6. 環境教育・環境学習（関係条文：法第 21 条）

滋賀県の小学校では、「うみのこ」「やまのこ」「たんぼのこ」など自然環境を活かした体験型の環境教育が行われています。特に学習船うみのこによる「びわ湖フローティングスクール」は、県内の全ての小学校 5 年生が湖上で 1 泊 2 日の学習活動を行う本県の代表的な環境教育プログラムで、これまでに 50 万人を超える子ども達がうみのこに乗船しており、平成 30 年度からは、二代目となる新船の就航が予定されています。

また、平成 28 年 7 月に第一期リニューアルを終えた琵琶湖博物館は、琵琶湖について学ぶ拠点となっており、県内外の学校からも 442 校 37,922 名（平成 27 年度）の来訪がありました。修学旅行等の教育旅行においても、県内に宿泊する児童・生徒の延べ人数は 50,000 人を越えており（平成 28 年度）、学習先として先の琵琶湖博物館の他、自然と共にある暮らしの様子や、湖上スポーツの体験施設等への訪問などがあります。また、日野町など農家民泊の受け入れなどを地域ぐるみで進めている自治体もあります。

学校行事の他にも、自然を楽しみながら学ぶエコツアーリズムや、ラムサール条約湿地である琵琶湖でのバードウォッチングなど、全国からの来訪者に対し自然環境についての学びの場として活用されています。

## 7. スポーツ

平成 27 年制定の滋賀県スポーツ推進条例では、「琵琶湖をはじめとする豊かな自然環境、観光資源等を活用し、地域の特性を活かしたスポーツ」に重点的に取り組むこととされ、県スポーツ推進計画においても、「琵琶湖を舞台とした湖上スポーツの推進」が掲げられています。ボート競技やペーロン（ドラゴンボート）など、琵琶湖がメッカとなっている湖上スポーツがあり、カヌー競技などでも国際大会で活躍する選手を輩出しています。また、平成 29 年 9 月には西日本で初めてウェイクボードの世界大会が開催されました。

オリンピック・パラリンピックに向けて、選手の発掘・育成の強化などが進む一方で、レジャーとしてカヤック等の湖上スポーツを楽しむ人も増えており、ウォーターボールやSUPなど、新たな湖上スポーツも登場しています。

また、琵琶湖の周囲では国際大会の代表選手選考会も兼ねる「びわ湖毎日マラソン」や、山間部では自然を活かしたクロスカントリー、トレイルランなどの大会も開催されています。全ての人々が身近にスポーツを楽しむことの出来る共生社会を目指す中、マスターズなどの生涯スポーツや障害者スポーツの舞台ともなっています。

## 8. 健康づくり・医療

健康への意識の高まりを受けて、朝や夕方を中心に、多くの方が湖岸緑地等でのウォーキングやサイクリングを楽しむ姿が見られます。近年では、健康づくりや癒しの効果を求めて、湖畔でのヨガや、SUPを使った湖上ヨガなども開催されています。

琵琶湖畔にあるおごと温泉では、湖岸を活かし、南湖一周や湖上のルートも設けたウォーキングイベントが開催され、全国各地からの参加があります。

## 9. 暮らし

湖岸の家庭において、かつて琵琶湖は風呂の水汲みや野菜などを洗う場としても活用されていました。湖へと突き出した簡易な栈橋「橋板」は、上水道の普及に伴い昭和30年代以降次々と姿を消していきましたが、近年住民による保存や再生の取組が進んでいます。

また、湖畔のヨシも、かつては屋根の葺き替えやすだれ等の材料として暮らしに欠かせない琵琶湖の恵みでした。暮らしの中でのヨシの使用が減った近年では、ボランティアによるヨシ刈りや、ヨシ松明などの行祭事が、ヨシ原の保全育成に貢献しています。

暮らしと湖の関わりについては、地域の活性化の観点から国土交通省が平成23年に河川敷での民間事業者による営利活動についての規制を緩和し、平成29年度からは県も琵琶湖岸でこれに準じた規制緩和を行いました。今後地域の関係者の合意を得ながら、湖岸でくつろぐことのできるオープンカフェ等の登場が予想されます。

## 琵琶湖活用についてのヒアリング結果

- 検討会議委員の皆さまに加え、更に多様な視点からも「琵琶湖活用」について意見を伺うため、各方面を訪問してのヒアリングを実施
- 今回の検討会議に先立ち、下記の2名を訪問した。  
沖島離島振興推進協議会相談役（前会長）・西福寺ご住職 茶谷文雄さん  
おごと温泉観光協会会長・琵琶湖グランドホテル京近江代表取締役 金子博美さん
- 今後も継続して、異なった切り口からの意見を伺う予定

### 訪問先 1

沖島離島振興推進協議会相談役（前会長）・西福寺ご住職  
茶谷文雄さん（平成 29 年 9 月 20 日訪問）

#### 【訪問理由】

琵琶湖と密接なかかわりの元で暮らしてきた沖島島民の視点から、琵琶湖活用についてのご意見を伺いたく訪問。

#### 【ヒアリング内容】

##### ■湖魚に関する「体験」の機会

- 琵琶湖の恵みについて島での一番の活用は、「魚」を獲って売ること。島でも漁師の数が減り、湖魚を食べる家庭も減ってきたが、「鮎ずし作り体験クルーズ」（琵琶湖汽船主催）は例年盛況で、リピーターも多い。自分でふなずしを漬ける、という体験があることで、食べたいとの思いや味へのこだわりも増すのだろう。
- 現在は日を決めて開催されているイベントが、常設の「体験工房」のようなものができれば、体験を通じ湖魚に関心を持ってもらえる。
- 生きた魚に触れる機会が減っている中、島での「地引き網」体験は貴重な機会であり、もっと広めるべきだと考えている。

##### ■昔の暮らしの体験の機会

- 島の子どもは昔、「タライ船」に乗って遊んだ。タライ船での競争や島一周などは非常に楽しい思い出。監視は必要だが、今の子どもたちにも体験できるのではないか。

##### ■今後の活用に向けた拠点

- 湖西側にある「石切り場」の跡を活用できないかと考えている。港ができて今津航路ができれば、人の動きが複合的になる。
- 人口減少に伴い増えている「空き家」を活かす手がないかを考えている。離島振興推進協議会でも、既に一軒空き家を押さえている。

## 訪問先 2

おごと温泉観光協会会長・琵琶湖グランドホテル京近江代表取締役  
金子博美さん（平成 29 年 9 月 21 日訪問）

### 【訪問理由】

湖岸でのウォーキング等のイベントを多数企画しておられるため、主に「健康づくり」面からの琵琶湖活用について意見を伺いたく訪問

### 【ヒアリング内容結果】

#### ■アクティブヘルスツーリズム

- 「おごと温泉アクティブヘルスツーリズム」として、運動・入浴・食事を一体で展開。ポールを使った「ノルディックウォーク」の用具貸出やマップ作成などを行っている。
- 「おごと温泉・びわ湖パノラマウォーク」では、様々な方に参加いただけるよう、42.195kmの南湖一周コースから5kmのファミリーコースや、湖上を体験いただける船を使ったコースも設けている。全国から参加があり、中高年の男性が多い。
- 大会を主催するのは、「南湖一周が 42.195 キロである」ことをアピールしたいという思いが強い。湖岸は平坦で歩きやすい反面、競技志向の方には「退屈」とも言われる。

#### ■「びわ湖一周トレイル」構想

- 「びわ湖比良比叡トレイル」の整備を進める協議会を先日立ち上げた。既存の高島トレイル等とをつなぎ、ゆくゆくは「びわ湖一周トレイル」にできないかと思っている。山版「ピワイチ」であるが、全国の他のトレイルとは異なり、「常に眼下に琵琶湖を見ながら歩く」周遊コースになる。既存の公共交通とのリンクがし易い点もメリット。

#### ■温泉施設来訪者への琵琶湖体験

- 観光やビジネス、教育旅行などでおごと温泉を訪れる年間 60 万名ものお客様に、せっかく来たのなら日本一の琵琶湖を実際に体験して欲しいという思いから、夕食前の「びわ湖湖上お散歩クルーズ」や早朝クルーズなどを展開している。
- 現在の雄琴港は防波堤の形から大型船の入港に時間がかかるため、うみのこやミシガンとの連携は困難。企業研修や修学旅行などに大型船を活用できると面白い。
- 湖西線は常に湖と山を見ることができると絶景の路線

#### ■地域活性化への貢献

- 運動の後に温泉に入っただけであれば、という思いはあるが、まずはアクティビティを体験しに来る人が増え、湖西線やバス路線などの経営の安定や、地域が元気になることが肝要と考えている。